



〈愛〉をつくるミオの赤い傘

どこからきたの？ 誰も知らない
いじめても泣かなかったよと、子供たちはささやき合う

妖精の詩^{うた}

〈カラー作品〉

MIO RAPHAËLLE BRIGITTE FOSSEY

REALISATEUR: SUSUMU HANI

MUSIQUE: JEAN GUILLOU, ICHIRO ARAKI



監督：羽仁 進
 製作：ジャック・ブリュネ
 撮影：マリオ・マジニ
 音楽：ジャン・ギュー
 荒木 一郎

ミオ：羽仁未央
 ブリジット：ブリジット・フォッセイ
 ラファエル：ラフェエル・カスト



☆詩的であり、驚くほど印象的

〈仏・評論家〉マックス・テッシュエ氏評
 羽仁進の心の中の世界の、もつともみことな表現。深く詩的であり、驚くほど印象的である。あらゆるショットに、優しい感受性が見なされる点で、まさに個人的な作品だが、レアリスムとファンタジーが実にもことまざりあっている点で、強い表現力をもって我々に語りかけている。

まるで処女作のようにうまいしい情感と、完全に自由な創作方法は、驚異的でさえある。

☆素晴らしい実験

辰 見 敏 夫 氏評

この映画は素晴らしい心理学の実験だ。一人の少女ミオが、ある日突然に髪の毛の色も、眼の色も違っている、言葉も通じない子供達の中に生活をしてゆくことになる。

しかし、世俗の知識によってほかされてしまった素朴な愛の論理を展開することによって、仲間になつてゆく。

しかも、その愛情の過程が、ミオの眼を通して描かれてゆく。素晴らしい実験だ。

■内容

吹きわたる冷たい冬の風に運ばれるように、女の子は島にやってきた。首から吊した名札には「ミオ」と名前が書きつけてあった。

どこか遠い東洋の国から来たらしく、島の言葉は全く知らなかった。好奇の視線にとりまかれて、孤児院に収容された彼女は、ぼつんと小さく頼りなげだったが、時折見せる可憐でナイーブな笑顔は、最初から不思議な魅力で人々をひきつけた……。

島の孤児院を中心に、ミオの新しい生活が始まる。環境にとけこみ、言葉をおぼえ、意志を通じあつてゆく過程は、子供の世界では驚ろくほど早く、なめらかだ。

やがて、ラファエルという可愛い男の子との出会い。幼ない愛の芽はとその成長が、ほほえましい自然さで描き出されてゆく、大人の世界に起つた事件のために、二人の別離がやってくるまでを、子供の世界にびたりと眼を据えて、そのナイーブなエネルギー、みずみずしい自由、純な美しさを、大人社会を背後に対比させて可能な限りストレートに、いきいきと描き出そうとした羽仁進監督の野心作。

「絵を描く子供たち」に始まる子供世界に対する深い関心は、「不良少年」「初恋地獄篇」など、羽仁監督の作品に一貫しており、そのなかに現在のいわゆる大人世界が失つてしまった、より素直な人間関係を、のびやかさを、

平明な安らぎの理想を追求しようとする作家テーマは、この作品において見事な結晶をみせたといえる。

日本の監督として初めて、すべての撮影スタッフに外国人を使い、出演者も主演の未央ちゃんを除いて全部外人。ロケ地にはイタリアのサルジニア島を選ぶという思いきった冒険が、テーマとどぶりあつてユニークな効果をあげており、不思議な透明感と魅力的な優しさに溢れた第一級の映像詩を造りあげている。

羽仁監督の愛嬢であり、「初恋地獄篇」にも出演していた小さなヒロイン未央ちゃんの天衣無縫のユニークな個性は、可憐な妖精の軽ろやかさと、一個の人間としての存在の鮮明さを、合わせて画面に躍動させている。

往年の名作「禁じられた遊び」の名子役だったブリジット・フォッセイが、孤児院の保育役として扮しているのも話題で、「禁じられた遊び」のあの小さな女の子のイメージは、時としてミオに共通性を持ち、時としてその時代的な違いを明らかにする。

優しく淋しい音楽を作曲しているのが、フランス、バロック音楽の第一人者、ジャン・ギューと荒木一郎。特にファーストとラストに使われる荒木作曲のテーマ音楽は、荒涼とした美しさを持つ、サルジニア島の風土にからみあい、やさしさのなかに孤独な抒情をにじませて、映画の感銘をいつそう深めている。

日本人の海外進出第一弾として大きな話題をまいた期待の作品である。

■小さな心に愛をつめて、ミオは碧いサルジニアにやって来た——

妖精の詩

〈カラー作品〉

日・仏合作/日本ヘラルド映画

MIO



■ガンとお得な特別鑑賞券450円〈当日、一般600円の処〉劇場窓口にて好評発売中！あなたもぜひどうぞ！

次回ロードショー **みゆき座** (591) 5357